アドミラとシェリスカ。

キサラギハルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アドミラとシェリスカ。

【Ｎコード】
Ｎ５９６１Ｏ

【作者名】
キサラギハルカ

【あらすじ】
私のご主人様は変人だ。
アドミラと、雇用主の変人魔法使いシェリスカの日常。
「眠りの国の王子と魔女」からずっと先の未来。サクっと読んでいただけます。

前編

私のご主人様は、変人である。

シェリスカ・エイドワース・ブラン・シェルサード　自称年齢２８０歳

自称年齢のところで、後ずさりした人がいたなら謝っておかないといかない。

彼は、魔法使いである。魔法使いというのは見た目と寿命が一致しない。見た目の年齢は、人間でいえば大体２０代後半といったところだ。

男でシェリスカという名前は珍しいらしいが、改名しようとしないということは実は気に入っているのだろう。ぼさぼさの金髪に、青い瞳。着古した感の強い白いローブ。実際、裾の方は私が何度も繕っている。

シェリスカ――シェリのほめられるところは今のところ一つだけだ。

そう、彼の青い目。とてもとても深い青の色。あの瞳で見つめられたらきっと誰もが吸い込まれそうだと思うだろう。だが、今日の彼はまだ眠っている。青い瞳は瞼に覆い隠されている。

「もう８時・・・」

焼きたてのトーストと淹れたてのコーヒーをテーブルに置いてから、私はシェリの部屋のドアを叩いた。

「シェリ、起きてください」

いつものように返事はない。

「シェリ、今日は魔法庁に行かなきゃいけないんじゃなかったんで

すか？昨日、私の肩を砕きそうな勢いでがしがし揺らしながら『明日こそ行かないと僕は僕は除名されてしまうかもしれないからお願いだから何があっても何としてでも起こしてくれ』って言いましたよね？」
「・・・・・起きてるよー・・・・」
わずかに聞こえた声は、どう聞いても起きぬけの声だったが、
「それは失礼しました。では早く朝食を食べてください」
もう突っ込みを入れず、私はドアの向こうへそう声をかけた。
「・・・・了解」
亡霊のような声で、返事が返ってくる。
テーブルへ戻ってハムエッグをシェリのトーストの横に追加していると、シェリの部屋のドアが開いた。
「おはようございます。シェリ」
「おはよう・・・アドミナ」
いつものように白いローブを着て出てきたシェリは、まだ眠いらしい。あくびを噛み殺しながら朝の挨拶をしてくる彼に、
「コーヒーは濃い目に作りましたから、眠気もとれるはずです」
「さすがに気がきくね」
シェリは苦笑しながら向かい側に座った。そして、コーヒーの入ったカップを持ち上げたところで、ふと私に青い瞳を向けてきた。
「ええと、今日僕は魔法庁に行くって言ってたっけ？」
「はい」
「そうか…じゃあ行かないといけないんだろう…覚えてないけど」
「飲んだときに約束するからですよ」
行きたくないオーラ全開でちびちびとコーヒーを飲み、トーストをかじるシェリ。
「魔法庁があなたに何かすることなんてありえないんでしょう？」
「それはないけどさ」
「講義のひとつやふたつぐらいなら」
「それを一回でもやっちゃうと、際限がなくなる。だからねぇ」

あなただって、誰かに教えてもらったでしょうに。
シェリの顔には、めんどくさいという文字がはっきりと浮かんでいた。

「君が聞いてなければいくらでもごまかせたんだけど、しょうがないな」
家のドアをくぐるときまでそう言って、シェリは魔法庁へ行った。
その数時間後、私は買い物に出かけた。　首都カルナデの中心部に位置するシェリの家は、どこへ行くにも都合がいい。駅へも近いし、市場へも近い。こんなに便利な場所に持家があるのはうらやましい限りだ。まあ、私の部屋もひとつもらっているのだが。
最初の雇用契約では住み込みではなく、シェリの家に通うことになっていたのだ。それが住み込みに変更されたのは、シェリが変人だから。
シェリの変人ぶりをどこから説明してよいものか…非常に悩むところだ。
あれこれありすぎるのだ。
「ねぇ」
「え？」
私は、肩にトンと置かれた手の細い指の感触に驚いて後ろを振り向いた。立っていたのは、シェリの行きつけの居酒屋、黒猫亭のマスターの娘であるマリンリィ。まだ中学生である。茶色の長い髪を頭のてっぺんでひとつにまとめ、長めの前髪を顔の左右に流している。緑色の目はどこか苛立ちを帯びていた。
「ああ、マリンリィおは」
「シェリいるから連れて帰って！じゃあ！」

道路に穴を開けそうな勢いで、こちらに背を向けて彼女が歩いていく先は、中学校。そういえば、制服を着ていた。
「朝からマスターとケンカでもしちゃったのかな」
反抗期ってやつなのかもしれない。
私は買い物を後回しにして黒猫亭へ向かった。シェリは魔法庁へ行かなかったのだ。さすがに朝から酒は飲んでないだろうが、たぶんおそらく――――
黒猫亭は、首都の中にある建物の中でも古いほうに入る。色あせた水色の壁に白いドア。ビルが立ち並ぶ中、ぽつんとそこだけが古い時代のよう。でも私は嫌いではない。　黒猫亭のドアを開けると、マリンリィと同じ色の髪と目を持ったマスターと目が合い、奥の席を目配せされた。
「…シェリ」
シェリは奥の席に座ってがたがたと震えていた。
「…めな…んだ」
「除名がかかっていてもですか？」
魔法庁に属するものにとって、命の次に大事なのは魔法庁の保護や援助である。除名されれば彼らのほとんどは生きていけないらしい。
「除名は…されないよ」
シェリが青い顔でぼそぼそと言う。
「なら、いいじゃないですか。帰りましょう」
シェリはこくんと子どものようにうなずくと、私が差し出した手を取った。

シェリを連れて市場で買い物を済ませ、家に帰ってきたときだっ

た。誰かが家の前に立っていた。それに気づいたシェリはあからさまに嫌そうな顔をした。

なぜなら、魔法庁からのお客だったからだ。

中編

「帰ってもらおうかな・・・」
シェリはぼそっと呟いたが、そんな失礼なことができるわけがない。魔法庁からのお客が用事があるのは絶対にシェリなのだから。
家のドアまであと数メートルというところになっても後ろ向きなシェリを、私はどんと前に押し出した。
「ああ、シェリスカ殿ですね？」
飾り一つない、うちの家のドアを眺めていた魔法庁からのお客は、ゆったりとした口調で言った。
「ええと・・・」
「よろしければですが、お話したいことがありますので家にお邪魔してもよろしいですかな？」
「はい」
シェリは、青い瞳を悲しげに伏せながら言った。

「ほう、これは・・・」
シェリの家には、テーブルがひとつしかない。お客が来ても、座ってもらう場所は食事を取るいつものテーブルだ。
「こういった飲み物は初めてだ」
そのテーブルに向かい合うようにして、私がいつも座っている席にシェリが、シェリが座っている場所に魔法庁からのお客様であるアレン氏が座っていた。アレン氏は、ぽっちゃりした体型のおじさんだった。そして、私が作ったカフェモカ（表面が泡立っているやつである）を見るなり、小さなグレーの瞳を丸くして見入っていた。
「それは、コーヒーに泡立てたミルクを注いでいるだけなんです。

こちらではそういう飲み物が最近流行っていまして」
「なるほど」
アレン氏は、そこで気がついたかのように頭の上にのせていたグレーのシルクハットを取った。
「失礼。どうも外出の機会が少ないと礼儀を忘れてしまう。シェリスカ殿」
カフェモカをちびちび飲んでいたシェリは、びくりとしてアレン氏に顔を向けた。アレン氏は、グレーのスーツをぴしりと伸ばすように姿勢を正すと、
「今日、ここに来たのはですな、お話があるからです」
「・・・わかっています」
「ええと、こちらの女性はあなたの」
「単なる家政婦です。もちろん、同席はしません」
シェリだって、いくら何でもそのつもりだろうけど、私はさっさとそう言ってしまって自分の部屋へ行くことにした。
「そのほうがいいね」
シェリが、いつもよりははっきりとした口調で言った。
（シェリ？）
「ねえ、アドミラ。今日の晩御飯は君の得意なビーフシチューがいいな」
そう言ったシェリは、青い瞳を細めて笑っていた。
「わかった・・・」
私は呻くように返事を返すと、とりあえず自分の部屋へ向かった。

部屋の中には、アレン氏と彼だけが残された。
しん、とした静寂が二人を包む。ティーカップから立ち上る湯気だけが、静寂の中でも自由に動いていた。彼は、またちびちびとカフェモカを飲んでいた。アレン氏に構うことなく。

「もう、何度も要請していることですが、我々のもとへ来る気はありませんかな？」
彼は、両手で持っていたティーカップから左手を離した。
「我々は、あなたを必要としている」
彼は、ティーカップを傾けて全て飲み干すと、静かにテーブルの上に置いた。
「あなたの力、知識が必要だ」
「僕を必要とするなんて、まともじゃない」
アレン氏はぎくりと身を震わせた。
彼が、深い青い瞳をアレン氏のグレーの瞳にしっかりと合わせたからだ。どこかか弱いように見える青年の姿はどこにもなかった。
「もう一度言う。僕を必要とするのは、まともじゃないことをしようとしているからだ」
「我々はただ」
「アレン氏。僕はね、あなたを見たことがあるんだよ。小さい頃だったけれど。だから、あなた方が何をしようとしているのか知っているんだ。いや、何を考えているのかといった方が正しいのかな。そのときに僕が何もしなかったのはね、ただの遊びだと思っていたからだ。ただの真似ごとだろうと」
「遊び？真似ごとだと？！」
アレン氏は、小さなグレーの瞳に憎悪の炎を燃え上がらせた。
「邪悪なる神なんて、存在しないんだよ。アレン氏。歴史が証明している」
向けられた憎悪に、彼は微笑みながら言った。
「応じないというのであれば、あの家政婦がどうなってもいいのか！我々が貴様のことを何も掴んでいないとでも？」
彼の青い瞳が一瞬だけ深みを増し、冷えた。
「あなた方が何を掴んでいようが」
彼はくすりと冷たい笑みを浮かべて続けた。
『僕には勝てない』

そのとき、アレン氏には、彼の瞳が光ったかのように見えたかもしれない。一瞬の間になされたことだった。足元に出現した魔法陣を見たと思ったら、それを読む時間すらなく、アレン氏は床に倒れていた。

倒れたアレン氏が見上げたその先には、彼が座っていた。

「今のは・・・」

アレン氏の体はがたがたと震えていた。何が起こったのか全く理解できなかったからだ。

「魔法陣を展開させ、軽い衝撃波を当てた。それだけだけど？」

「しかし、いつ描いたのだ・・・？」

「さあ、いつでしょうか？当ててごらん。また会いにくる勇気があればそのときでも教えてよ」

彼は、アレン氏に手を差し出したが、アレン氏は取らなかった。自分で立ち上がり、よろよろとした足取りで彼の家を出て行った。

後編

ドンドンドン！

ひどく乱暴なノックの音に、私はため息をついた。ビーフシチューをかき混ぜていた手を止め、ついでに火を止め、ドアを開ける。

「ねえ！あんたのところのあの魔法使い！」

乱暴なノックがするときに、ドアの向こうに立っているのはたいてい一人なのだが、今日は大勢で押し掛けてきていた。私は、一番前で怒りのオーラをまとっているおばさんに聞いた。

「今日は何でしょう？」

「今日は何でしょう？あんたもあんたよ！一回ぐらい、すぐに、すみませんとかいう言葉を使ってみたらどうなのよ！それに、いつも涼しそうな顔しちゃって！」

「謝るのは、ちゃんとお話を聞いてからです。顔については生まれつきなのでどうしようもありません」

「はあーっ！もうっ」

きっとシェリが悪いのだろうが、どういうことなのか話そうとしないおばさんを放っておいて、私はおばさんの後ろに視線を向けた。

「誰か、他に状況を教えてくださる方はいらっしゃいませんか？」

すると、若い女性の声がした。おばさんがまだ私の前に立っているので姿は見えない。

「シェリスカさんが、きっと子どもたちがせがんだからなんだと思うんだけど、飴を空から降らしたり、そのええと・・・マギーさんの家をお菓子の家に変えちゃって。・・・マギーさんの家は、壁が気の毒なことになってるのよ」

「飴を止めて、家を元に戻させればいいんですね？あと、もちろん謝罪も」

「当たり前でしょ！家がなくなれば私はどこで生活すればいいのよ！」

目の前のおばさんが青筋を立てながら怒鳴った。
「マギーさん、ちゃんと本人を連れてきますから。皆さんのところにもちゃんと連れて行きますから！」
私は叫ぶように言うと、家を飛び出した。
探し回るまでもない。シェリは、家のある通りの中で一番高い建物である、教会の屋根の上に座って空に向かって右手の人差し指をくるくる回していた。それに合わせるようにして、空から飴が道路に向かって落ちる。道路には子どもたちがぽかーんとした様子で立っていた。最初でこそ喜んだものの、いつまでたっても落ちてきて、しかもどんどん道路につもっていくのでどうすればいいのかわからないのだろう。
「シェリ！」
私は大きな声で名前を呼んだ。でも、シェリは指を回すのを止めようとしない。聞こえていないし、下の様子を見ていないのだろう。様子を見ないなんて魔法使いとしてどうかと思うが、聞こえていないのなら、シェリの元へ行くしかない。私は、大きく深呼吸すると、そばにあった梯子を教会の一番低い屋根にかけた。ぎりぎり届くという長さだが、他に代わるものはなさそうだった。梯子をかけると、次に男の人を二人連れてきて梯子を支えてもらえるように頼んだ。ただし、今日は短いメイド服を着ているので下を向いていてくれるように頼むのも忘れなかった。
屋根の上にのぼるのは日常茶飯事というほどではなかったが慣れてはいた。そして、屋根の上を歩くのも平気だった。風もそこまで強くなく、肩までの髪はそんなに乱れない。
「シェリ！」
シェリは、私が今立っている屋根よりももう一つ上の屋根に座っている。
くるくる回る指は止まらない。それでも、私の声は聞こえたらしい。
「アドミラ？」

「そうです！私です！」
「そんなに大きな声出さなくても・・・ちゃんと聞こえてるよ」
「空から降る飴を何とかしてください。それから、マギーさんの家もちゃんと元にもどしてくださいね」
道路につもった飴は、子どもたちの腰の高さまでになっていた。動けないことで泣きだしている子もいる。
「あ、やりすぎたかー」
シェリは、指を止めた。
「ええ、やりすぎです。マギーさんの家もね」
「怒られるんだね・・・僕は」
しゅん、と肩を落としたシェリがこちらに降りてくるのを待って、
「覚悟しておいてください」
私は、一番気の毒なマギーさんの顔を思い浮かべながら言った。

あの後、マギーさんをはじめ、街の人々に説教されまくってふらふらになったシェリを家に連れて帰ってきて夕ご飯を食べさせ、洗い物を済ませて私が自分の部屋に戻ろうとしたとき、すぐに部屋にこもるシェリがテーブルでシルクハットを回していた。
「それ、アレン氏の忘れ物ですか？」
「うん。忘れていったみたいだね。まあ、取りに来たければ来るんじゃないのかな」
「届けなくてもいいんですか？」
「いいよ。アレン氏にとってはもうどうでもいいかもしれないし」
意味がわからなかったが、私はとりあえず納得することにしてシェリからシルクハットを取り上げた。
「でしたら、取りに来られるかもしれないときのためにきちんとしまっておきますね」
「まあ、そうだね。じゃ、おやすみ。アドミラ」

額へのキス。シェリの顔が近付いてくるときから離れるまで、私はいつも目を閉じている。なんとなくだけど、シェリのあの瞳を見てはいけないような気がするのだ。
「おやすみなさい。シェリ」
私からシェリにキスすることは、当然ない。命じられたことも、頼まれたこともないからだ。だいたい、雇用主にキスをせがむ家政婦がどこにいるのだ。シェリだって考えたことないだろう。
私は、アレン氏のシルクハットをクローゼットの中にしまいこむと、自分の部屋のベッドにもぐりこんだ。まっすぐでうらやましいと美容師が言っていた黒髪が布団の上に広がる。
シェリは、もう眠っているころだろう。寝付きはいいけど、寝起きは悪いのだ。シェリは。
私も目を閉じた。

彼は、息をついてから目を開けた。 隣の部屋の彼女はもう眠っているころだろう。眠りを邪魔しないためにも、どんなささいな音でも立ててはいけない。
(いつまでもごまかせないか・・・)
昼間の客。魔法庁の内部からの使い。
(彼らこそ、気づくべきなんだけど)
あがめるものはいないと。
しかし、彼らが彼を欲しているのはもう明らかだった。
理由でさえ、明らかだ。
(シェルサードの血がそんなに必要なのか)
しかも。
(ブランジェットは、もう僕ひとりしかいない。それに・・・ああ)
いまは、やめよう。
彼は眠りに落ちるために、再び目を閉じた。
夜が明ければ、また彼女が起こしてくれる。トーストとコーヒー

を作ってくれる。
その日常が崩れることはない。
いや、決して崩すようなことはさせない。
そう誓って。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5961o/

アドミラとシェリスカ。

2010年10月31日13時05分発行